

修 理 前



修 理 後



修 理 前



修 理 後



深鉢形土器 (No.101)
縄文時代後期後葉 瘤付土器第Ⅳ段階。最大径45.3cm、高さ47.3cm。口縁部は2条の刻みの入った山形突起間に1条の刻みが入った2ヶ1単位の小山形突起が巡る。口縁部は弧線を組み合わせた文様で、胴部には入組文・擬縄文が施される。本来傾いている土器のため、そのままの形で修復。補修孔2対に伴う亀裂は表現し、補修孔穿孔時の土器表面の剥落痕は残した。

鉢形土器 (No.49)
縄文時代後期前葉 南三十稲場式(新)段階。最大径24.0cm、高さ14.0cm。胴部上半が最大径。口縁端部に刻み列が巡り、口縁部には7ヶの重楕円文が配され各間に7箇所の貫通孔が施される。胴部には重円文と斜位の集合沈線文の隙間に斜沈線文が充填される。底部外面には網状痕が残る。内外面に黒色付着物あり。残存部から文様を補刻した。

鉢形土器 (No.40)
縄文時代後期中葉 加曽利B2式併行。最大径24.0cm、高さ17.2cm。3単位の大波状口縁で、口縁部に沿って4条の平行沈線が描かれる。沈線区画内は磨消縄文で、区切り文には蛇行沈線と括弧文が施される。底部外面には平行葉脈痕、外面に黒色付着物あり。充填部には、残存部から位置を推定し亀裂痕と1箇所の補修孔を復元した。



浅鉢形土器 (No.51)
縄文時代晩期前葉 大洞BC式併行期。最大径18.0cm、高さ5.8cm。口縁部がほぼ直線的に外へ開いて立ち上がる。口縁上端部には列点文と退化した羊歯状文、胴部には羊歯状文的なX字文が施される。底部外面は円形文が巡り、研磨痕が著しい。欠損部は残存部から割り付けて文様を補刻し、底部外面の研磨の状況も残存部を模して復元した。



片口付土器 (No.138)
縄文時代後期後葉 瘤付土器第Ⅱ段階。最大径13.5cm、高さ8.0cm。巻貝形土器から変容したもので、左右非対称。左側面には口縁に沿って平行沈線で画された磨消縄文が施され、右側面には磨消縄文と縦割貼瘤を基点とした弧線が描かれる。胴部は無文。大きく欠損した片口部は残存部を参考に復元し、文様を補刻した。



深鉢形土器 (No.88)
縄文時代晩期後葉 大洞A式前半・鳥屋1式併行期。最大径15.0cm、高さ16.4cm。口縁端部に面を持ち、口縁部外面に1条の沈線が巡る。胴部は押型文帯3段が先に施文された後、それらの間に結節S字縄文が施される。欠損部は残存部から文様を補刻し、押型文帯と結節S字縄文の切り合い関係も表現した。



単孔壺 (No.184)
縄文時代後期後葉 瘤付土器第Ⅱ段階。最大径18.0cm、残存高19.0cm。口縁部は緩やかに内傾し、胴部が最大径となる。口縁部は帯縄文、胴部はネガポジ反転の弧線磨消縄文で文様交点部に貼瘤が付される。胴部下半に1箇所の円形貫通孔。大きく欠損する写真裏側は残存部から復元した。なお、底部は大きく欠損しているために復元していない。



壺形土器 (No.5)
縄文時代晩期後葉 大洞A式前半・鳥屋1式併行期～大洞A式後半・鳥屋2a式併行期。最大径9.6cm、高さ11.4cm。算盤玉形の胴部に筒状の口頸部が付き、口縁端部に山形突起1単位が付く。口頸部には工字文、胴部には2条の平行沈線が施され、下の沈線は胴部最大径上を巡り5ヶの貼瘤が付される。器面と黒色付着物の安定化のために剥落止めを施した。

